

研修報告書

平成30年11月20日

宮田村議会議長 様

産業文教委員長 久保田秀男

1. 日 程 平成30年10月18日(木)・19日(金)
2. 参加者 産業文教委員会委員長：久保田 秀男
同 副委員長：小林 宏美
同 委員：川手 三平
同 委員：天野 早人(副議長)
同 委員：竹村 照美
同 委員：田中 一男
宮田村議会議長 : 清水 正康
以上7名
3. 経 費 旅費規定による16,400円×7人=114,800円
4. 研修成果報告

研修先 福井県三方上中郡若狭町・福井県今立郡池田町

行程 AM7:30発 ~13:00 ~15:30発 ~ 17:30着

18日宮田村役場___里山カフェこころ___若狭町かみなか農楽舎___鯖江シティーホテル

8:45発~9:30 ~12:30 昼食:まちの駅~13:30 ~17:30

19日池田町役場___池田町農業公社___町の駅「こってコテいけだ」___宮田村役場着

1 日目【福井県：「かみなか農楽舎」における後継者育成・人材確保】

概要

若狭町は人口 1 万 4 千人余、「若狭湾」や「三方五湖」、近畿一美しい 1 級河川「北川」など自然豊かで風光明媚な地域であり、若狭湾国定公園の中心部に位置します。

「輝きと優しさに出会えるまち」をコンセプトに平成 17 年 3 月に「三方郡三方町」と「遠敷郡上中町」が合併し誕生した町です。

総面積 17, 865 k m²、田畑 2, 375ha (18.9%)山林 43.1%を占める中山間地。

財政規模はおよそ 105 億円、議会議員は 14 名

農業従事者は昭和 55 年に 2250 人 25、1%と人口の 4 分の一を占めていたものの平成 17 年には 922 人 11%となっています。

(1)説明者：若狭町産業課係長

農業生産法人有限会社「かみなか農楽舎」

地元住民と民間企業(設計事務所)が出資して 2001 年に発足した農業法人。

増え続ける耕作放棄地、不耕作地を何とかしたいとの思いはあるものの、若狭町の地元にはその担い手が少ない現状。そこで都市の若者に「農業・農村の担い手」となって貰える様 2 年間の「就農定住研修事業」補助制度を立ち上げた。(行政主導)

旧上中地区内の認定農業者に研修生を受け入れてもらい米を主体とし、野菜や麦の生産のノウハウを年間通して教えてもらう。

コースは半年・1 年・2 年の研修を行い将来若狭町での就農定住を支援する。

就農定住研修事業は町をあげて研修生を迎える体制がとられており、実践的な農業技術を学びながら、農産物の加工、販売経営、体験学習の受け入れなどの企画運営も随時行われています。

当日は若狭町産業課係長による取り組みの説明と農楽舎の施設見学を行いました。

行政が本格的に乗り出し、後継者育成と人材確保、定住政策を一体化して取り組んで成功している典型的な事例だと感じる。

また、国の「青年就農給付金事業」福井県の「研修奨励金」や「小農具等整備奨励金」若狭町の「新規就農者農業法人等経営参画奨励金」「新規就農者農業機械等整備事業補助金」「新規就農者住宅家賃助成金」など複合的な補助金を受けられる様、事務的措置を受け持っています。

農楽舎では研修生の募集から受け入れ、研修先の確保や作業研修、各種イベントの企画開催子どもたちの農業体験実施等、年間通して法人役員を中心に取り組んでいました。

又独立した新規就農者の経営支援も行っている。

経過的には、法人設立以来 17 年間で 43 人が研修を受け卒業後 25 人が町内に定住就農し、町内のうちの 1 割以上 230 ヘクタールを 20~30 歳代のアイターン青年が耕作している。

研修日には秋作業もほぼ終了した時期であった為、具体的作業はあまり見られなかったが年に 2~3 人の新規就農者が研修を受けながら定住に繋がっている事は経済的な面からもサポート体制が確立している事が大きな要因であると感じました。

2日目 【福井県今立郡池田町農業公社】

(1) 面談者：溝口副町長・農業公社センター長・施設案内職員1名

池田町は、福井県と岐阜県の県境に位置し、(平成30年6月1日現在)面積194.72km²、人口2,628人、世帯数943世帯、高齢化率43.01%、森林率約92%、農地面積450ha(内稲作320ha)であり、町の中心を国道が走りその両側は水田・すぐそばには山があり、山に囲まれた穏やかに見える町、農村地帯であった。宮田村・上伊那の方が地形に段差はあるものの、山と山の幅が広い、しかし当地は山間の集落と言うイメージであった。

また、昔ながらの立派な住宅も有るものの、繁華街も無く、上伊那で言ったら農道が町のメイン通りの様な感じであった。ただ寂しいと言うのではなく落ち着いている感じである。

今回(一財)池田町農業公社の取組を主体に視察研修と言う事であったが、先ず対応を下さったのが溝口副町長であり、50枚近い資料等も含め町の概要を一時間余、熱く語って下さった。しかし後の時間が短くなる。

○町の概要

- ・町の一般会計は約30億でありそれに過疎債が使える事が大きい。
- ・少子高齢化が急速に進んでいる地域であり、また人口の減少では、子育て世代の流出、特に女性の流出数が多い傾向が示されていた。よって、ほどほどの流入はあるにしろ、流出を防ぐ方策が必要と考えている。
- ・田園回帰をうたってきたが、行政では無理。個々でも出来ない事を大卒でも出来ないと腹をくくった。・・あたりまえをたやさない町へ。
- ・当地にはスーパーマーケット・コンビニが無い。・・2009年テストショップ「ゆいマーケット」開店・・2011年「こってコテいけだ」に名称変更・・2012年リニューアルオープン。近年ドラッグストアがオープン。
- ・福井市内のショッピングセンターに、池田町産マーケット「こっぼい屋」を出店し、年間150種の野菜等を置き、28年度売上約1億4千万円。
- ・移動販売車(こといけ号)による販売。週4日：上2日・下2日の運行
- ・お金の巡回を考え、町外への流出を減らし、町外から入って来るお金を増やす戦略 他 地方創生の取組等についても聞いた。

○池田町農業公社

- ・1994年4月業務開始：職員数8名
- ・業務内容は、堆肥製造・循環型農業推進・複合経営研究・6次化推進・農業推進事務局
- ・公社はJAの代わりをしている。JAの合併の影響もあるが、米は特別栽培米がダントツであり、JA出荷は無く直接個人が業者へ販売。販売価格が高い。
- ・土地の流動性は無く耕作者が高齢化した時の受け皿に問題がある。宮田の様な営農組合組

織は無いようだ。

- ・池田町は無農薬と言う宣言をしている。平成12年から「ゆうき・げんき正直農業」とし水源地域の町として、環境に配慮した有機栽培を積極的に進めてきた。独自の認証制度「ゆうき・げんき正直農業」により、有機栽培の程度を3つに分け、マーク（シール）を交付する。金色・赤色・黄色。

この事は、個人で有機農業に取り組むよりも、池田町でやればそれで有機農業者となれる。

- ・公社がトレーサビリティを行いながら営農指導する。75歳～80歳のオバチャンが主力・・・オバチャンの息子が後継・・・オバチャンの孫世代が積極的である（次世代の主力となりそう）
- ・当地には、プロ農家はいない。家庭菜園が主体。
- ・「こっぼい屋」開業それは「百匠一品」事業化・・・「百匠一品」の精神に基づき、町民が「101匠の会」を結成。各自が食べきれない野菜などを持ち寄り販売を始めた。（公社が運営）収集車が商品を集め、店に持ち込む。委託料は20%。家庭菜園の余り物が1億円を生み出した。これにより自分達の商品の価値を認識「村の誇り」の創造につながる。
- ・生活できる売り上げは出来ない。施設園芸がない・・・課題である。
- ・生命に優しい米づくり・・・環境保全型農業：無農薬・減農薬
生命に優しい米販売・・・農家が出資し販売専門業者設立：(株)池田町米穀協同屋
- ・食品資源再生事業「食Uターン」・・・生ごみの年80t・紙袋での回収・袋も一緒にかくはん発酵させ堆肥化する。土魂壤（土に魂を）これをゆうき・げんき正直農業に使用（113.9t）
- ・事業設立資金はJA+行政の出資：6,000万円、今は補助金2,500万円等をもらい運営。売上プラス補助金で賄う。

○その他

なお、研修の時間を大幅にオーバーしてしまい、いろいろな取り組みをしている詳細及び公社の経理内容を聞くことが出来なかったのは残念であった。

また池田町には、多くの施設やイベントがあり、その事を視察するのも観光面で興味がわいた。（PR冊子は良くできていた。）

研修後公社の向かいにある町の駅「こってコテいけだ」にて昼食を摂った。町にあるただ一つのスーパーと言える店だが、宮田村の便利さを再確認した。しかしこの店に併設して簡単な食堂があり、こんな感じの店舗は宮田に在っても良いのではないかと思う施設であった。